

「浜松出身」という アドバンテージを糧に

昭和57年、デビュー曲「3年目の浮気」で一世を風靡した
“キーボー”こと山田喜代子さん。

音楽の檜舞台へ駆け上がっていった背景には、
音楽のまち・浜松出身という潜在的な要因が寄与していたという。

歌手

山田喜代子 Yamada Kiyoko

1957年浜松市生まれ。上京後、アルバイトをしながらボイストレーニングに励み、1982年「ヒロシ&キーボー」のキーボー役として歌手デビュー。デュエット曲「3年目の浮気」(作詞・作曲/佐々木勉)は73万枚を売り上げる大ヒットとなった。現在はピアノソロなどのジョイントライブを中心に活動。ジャズシンガーとしての一面を打ち出しながら、声優業への機会も模索している。



「『3年目の浮気』くらい大目に見てよ」デュエットソングの金字塔『3年目の浮気』は、30年経った今なお、世代を越えて歌われ続けている。大ヒットの後も、数枚のシングルを発表した。



音楽の世界へ足を踏み入れた当時のことを、山田さんはこう振り返る。「たまたまある方から『面白い声だね』と言われてボイストレーニングに通うようになったのですが、実は幼少の頃から自分のしゃがれた声が嫌で嫌で。それまでは音楽とは無縁の人生でした。レコーディング時には、遠州弁に悩まされましたね。微妙なイントネーションの違いですが、リズムがズレてしまっただけで。でも最終的には『遠州弁もキーボーの特徴だよな』って(笑)。それ以来、しゃがれ声と遠州弁なまりのスタイルが『私にしか出せない声』として理解されるようになったんです。

「3年目の浮気」でブレイクを果たした後は、幾多の試練や挫折を繰り返してきた。それでも歌手としてのモチベーションを維持できている理由は、「歌うことが好き」という純粋な思いと「音楽のまち・浜松で生まれ育った」というアドバンテージに支えられているからだという。

「結局、私には歌しかありません。だからもう一度深く、徹底的に歌の勉強をしようって。挫折しかけた時は、いつも浜松出身という誇りを胸に抱きました。浜松は本当に音楽環境に恵まれている街ですよ。浜松まじりのラッパをはじめ、楽器の音が浸透していて、世界的な音楽イベントも数々開催されている。私の中には、そういう環境で生まれ育ったという強みがあるからこそ、かき息づいていて、だからこそこうやって歌い続けていられるんだと感じています」。

山田さんは現在、ジャズ・ミュージックに心酔している。「自分の声に合っていて、歌うと心から気持ちいいと思う」という。私にしか出せない声の可能性をさらに追求できるステージを見つけたのだ。それはある意味「3年目の浮気」から30年染み付いたイメージを払拭させるように。また、浜松出身の歌手として音楽文化の発展の一翼を担うかのように。

浜松市の中心地、ゆりの木通り沿いの雑居ビルに佇む2つの書店は、写真家・若木さんの発案をベースに、都市の秘めたる可能性をくすぐり出そうとしている。「海外の魅力的な街には小さな本屋が点在していて、雰囲気が良いし、様々な人が出入りしている。そんな流れが東京にも根付いてきていて、『自分がやるなら浜松だろう』って。正直に言うと、勢いではじめたんですけど(笑)」。気になっていたのは、郊外に大型ショッピングモールが乱立し、中心街に人が集まっていないことだった。若木さんはそれを打破する意味でもオープンに踏み切ったという。「中心街にも面白い店はたくさんあるし、人はシャイだけどみんな熱いものを内に秘めてる。いろいろな人と話をしてみて、ポテンシャルが高い街だなと感じました。僕は浜松市を『ロンドンだったら、この街と同じ規模』『フランスだったら、あの街と同じ雰囲気だよな』という目で見ています。そこから『だったら、もつと面白くできるはずだろ』って」。どんなに小さくても、住む人が誇りを持っている街。おすすめのレストランを聞けば、すぐに候補が挙がってくる街。それが若木さんの考える「文化」のひとつだそう。2つの書店『BOOKS AND PRINTS』はその足がかりとして、そして高アンテナを持つ人の交流拠点として機能しはじめている。

インタビューの最後、若木さんはこのような提言で締めくくった。「浜松の人が浜松の人に媚びないこと。書店を通じて、これから数多くのイベントを企画していきますが、大切なのは『いかに県外の人から注目を浴びるか』なんです。そうすれば浜松に住む人の意識、外から見た浜松の印象が大きく変化してくると思います」。

世界の第一線で活躍する若木さんの言葉、行動見出したポテンシャルに対して、追従し、抜き去るレスポンスを派生させていきたい。

書店からくすぐり出す 故郷が秘めたポテンシャル

原点復帰か、はたまた原状回復なのか？

言わずと知れた写真家 若木信吾さんが、故郷に2つの書店をオープンさせた。そこは、積み上げられた書籍を隠れ蓑に、地方都市のポテンシャルを押し上げる“拠点”である。

写真家

若木 信吾 Wakagi Shingo

1971年浜松市生まれ。ニューヨーク・ロチェスター工科大学写真学科卒業。The New York Times Magazine, Elle Japon, Newsweekなど、数多くの媒体で活躍する。代表作は自身の祖父を撮り続けた写真集『TAKUJI』。その他、書店オーナー、雑誌出版、映画監督(『星影のワルツ』『トータム Song for home』)など幅広く活動。
<http://www.shingowakagi.net/>

若木さんが店主を務める書店は、浜松に2店舗。国内外の選りすぐり写真集、洋書、古書を取り扱うだけでなく、展覧会やイベント、ワークショップも開催。浜松のみならず全国からも客が訪れる。

BOOKS AND PRINTS - RED WEST
静岡県浜松市中区神明町315-15 1F
BOOKS AND PRINTS - BLUE EAST
静岡県浜松市中区田町229-13
KAGIYAビル2F

<http://booksandprints.hamazo.tv/>



小学生のときに写真と出会って以来、祖父・若木琢次さんを撮ることがライフワークとなっていた若木さん。祖父への思いを込めた、様々な作品が発表されている。

右:祖父のあらゆる表情を追った作品集『Takuji』(1999年)
左:今は亡き祖父へオマージュを捧げた映画『星影のワルツ』(2004年)のサントラCD。



HAMAMATSU

予想を超える体験は 小さな「気づき」からはじまる

想像を絶する大自然を見て感動するのと同じように、
アートにも「予想を超えた瞬間」が存在し、人々の心を動かす。
鈴木康広さんが生み出す体感型アートも、またそうであるように。

アーティスト

鈴木 康広 Suzuki Yasuhiro

1979年浜松市生まれ。2001年東京造形大学デザイン学科卒業。2001年『遊具の透視法』でデビュー。主な展覧会は羽田空港の『空気の港』(2009年)、浜松市美術館『鈴木康広展 - BORDER』(2011年)、東京大学先端科学技術研究センター中邑研究室特任助教。
<http://www.mabataki.com>



「けん玉は見立てて成立する遊び。玉の上に本体をのせる『灯台』という技は、玉を地球に見立てることで、灯台が地球の上に立っているように見える。」という鈴木さん。写真は、中学時代から使い込んだ相棒と、けん玉にりんごを引用した、地球の引力を体感できる作品『りんごのけん玉』。



鈴木康広作品集『まはたきとはばたき』(青幻舎)。作品写真や豊かなイメージの源泉となるスケッチ、テキストを収録。

右：瀬戸内国際芸術祭2010で出展した『ファスナーの船』。2011年には地元の浜名湖でも運航した。

左：開いた目と閉じた目が描かれた紙の葉が空中で回転し、『まはたき』をしながら空間に降り注ぐ。2003年発表の『まはたきの葉』。



photo:Katsuhiko Ichikawa
Courtesy of SPIRAL/Wacoal Art Center

2010年、瀬戸内国際芸術祭でファスナーの形をした巨大な船を発表し、話題をさらったアーティスト・鈴木康広さん。水面を進んでいく船をファスナーに見立て、「地球を開く」というイメージを現実化した作品は、「切り開かれた水面から、何が現れるのだろうか?」と、誰もが想像力をかきたてられた。

現在、東京大学先端科学技術研究センターで研究と創作活動に取り組んでいる鈴木さんだが、その柔軟な発想は、どこからくるものなのか。「人やモノとの出会いや関係のなかで、あたり前だったことが特別に思えてくることや、過去の記憶が蘇ってくることがあります。そんな『気づき』の瞬間が僕のアートワークの源です。身近なモチーフや日常にひそんでいるものに着目しながら、『見立て』の可能性を模索しています。そこにあるモノをまったく別の視点から見ると『見立て』。新しい視点で素材や技術を活かし、物理的、空間的に体感してもらおう。「人に見てもらいたい気持ちが一歩強いんです。だからこそ、直感的に伝わる方法を模索し、多くの人と共有できるものが生まれました。モノが持つポテンシャルを最大に引き出した瞬間の、みんなの驚きが見たいんです。」

2011年には浜松市教育文化奨励賞「浜松ゆかりの芸術家」を受賞し、ふるさとで初の個展を開催。ユニークな仕掛けの新旧作品を展示し、アートと市民をぐっと近づけた。

「作品を通じて、子どもの頃に誰もが体験したワクワクした感情を蘇らせたい。それは心を豊かにする、日常の奇跡なんです。その瞬間を生み出すことがアートの役割であり、社会の中の多くの局面が必要とされていることだと思えます。少年のように目を輝かせながら語ってくれた鈴木さん。予想を超える瞬間を求めて、今日もアイデアを耕し続けている。

映画でまちを元気に! 盛り上がりをもせる浜松の映画文化

映画「果てぬ村のミナ」

日本で2番目に広い面積を誇る浜松市は、自然豊かな政令指定都市。山深い北遠地区には美しい大自然が残り、古きよき日本の姿が保たれている。そんな山間のまち、水窪(みさくぼ)を舞台にした映画「果てぬ村のミナ」が今秋完成した。この映画は、過疎化が進む地域を支援する浜松市内の地域活性化プロジェクト「ミナの森」の呼びかけでスタート。物語には、失われつつある地域独特の方言や、文化を後世に残したいという強い思いが込められている。「村祭り」のシーンでは、地域住民がエキストラとして出演し、撮影をひと目見ようと観光客も訪れ、まちおこしにも一役買った。11月には、浜松における映画・映像文化の振興と全国への文化発信、地域の活性化を目的とした、第11回「はままつ映画祭」でも上映され、ふるさと浜松の魅力を再認識するきっかけとなった。同作品を通じ、全国への浜松市の魅力発信はじまったばかりだ。



©2012「果てぬ村のミナ」
制作上映委員会

浜松発。天空の村に芽生えた青春ファンタジー映画



緑鮮やかな茶畑が広がる山間の村に、不思議な魅力を持った美しい少女「神菜」が帰ってきた。60年ぶりに。他人には知られてはならない秘密を持つ少女と、そこに暮らす人々との交流を、素晴らしい自然を背景に描かれた物語。監督は、地域のコミュニティー、自然をモチーフにした作品に定評がある瀬木直貴。

監督:瀬木直貴 出演:土屋大鳳、石川湖太郎、TIKARA、木下かれん、小市慢太郎、高田俊枝、風間トオル、齊木しげる
主題歌:サンボマスター「ラブソング」(ソニー・ミュージックレコーズ)※2013年4月 全国公開予定。詳細はHPより。
<http://www.hatenumura.com>



映画でまちおこし

文化芸術でまちおこし

文化芸術の振興を地域全体で支え、
経済や社会の活性化につなげる「まちおこし」。
その取り組みは、町全体を元気にする原動力となっている。

歌舞伎でまちおこし



旧浦川中学校体育館で行われる定期公演は今年で24回目を迎えた。客席は、多くの観衆で埋め尽くされた。



役者から裏方まですべてを会員が行い、役者は全員男性が努める。地元の児童も出演し、後継者の育成にも取り組んでいる。



有志による歌舞伎役者が伝統の舞台を受け継ぐ
浦川歌舞伎

浦川歌舞伎は、さかのぼること150数年前の安政年間、病に冒された江戸の歌舞伎役者・尾上栄三郎が、名医・三輪見龍を頼り、裏鹿の地(現浜松市天竜区佐久間町浦川地区)を訪れたことにはじまる。村人たちは献身的に彼の世話をし、栄三郎はそれに報いるために病をおして舞台に立つが、演じている最中に舞台で倒れ帰らぬ人となった。この後、裏鹿の里では、栄三郎の歌舞伎に魅了された村人たちにより演じられる、素人歌舞伎が盛んになり、一流の役者を招聘して歌舞伎を鑑賞することも定着していった。しかし、高度成長期に入ると次第に歌舞伎は下火になり、いつしか忘れ去られていった。浦川の地から歌舞伎の灯が消えて20数年後、栄三郎の130回忌となる平成元年に、もう一度素人歌舞伎でまちを盛り上げようと、地元有志により「浦川歌舞伎保存会」が発足し、浦川歌舞伎は復活。現在もこの文化は受け継がれ、毎年9月の第4土曜日に定期公演が開催されている。

■浜松市佐久間観光協会 浜松市天竜区佐久間町佐久間2355-1
Tel 053-965-1651 <http://www.sakuma-kanko.net/>

ふるさとを愛した文化偉人

すぐれた功績を残した、浜松の文化偉人をクローズアップ。巨匠たちの生涯や作品を通じて、文化芸術への思いを汲み取り、今なお継承されている活動に目を向けてみよう。



すみれの花を咲かせたレビュー王

白井鐵造

自然豊かな山里、浜松市の北部で生まれた白井鐵造は、「宝塚歌劇団」という独自のレビューを確立させた演出家、歌劇団の代表曲となった「すみれの花咲く頃」は大ヒットし、80年余経った今でも歌い継がれている。

すみれの花が繋ぐ宝塚との絆

すみれ草花愛好会

町内の女性を中心に、すみれを育てて普及する活動を行っている。毎年宝塚市と歌劇団を訪問し、すみれの花を贈呈している。



すみれの里づくりを進める春野町では、「すみれ」と宝塚をキーワードに様々な活動が続いている。歌碑や、ロココ調の男女の石碑「ふれあい」の像の設置をはじめ、宝塚との交流も盛んに行われている。



タカラジェンヌと春野中学校の交流

春野中学校(旧春野南中学校)の修学旅行では、昭和30年代半ば頃から宝塚大劇場を訪れている。ステージを観たあとは、舞台にあがって春野町で育てたすみれの花をプレゼントし、記念撮影をするのが恒例となっている。



しらいてつぞう



偉人の足跡をたどる

天狗の住む霊山として「天狗の里」と呼ばれている春野町。浜松市白井鐵造記念館の敷地内には、日本最大級の天狗面が置かれている。この地で生まれ育った白井は、「芸能の世界へ入ったのは、天狗さまのお導きだったかもしれない」と後に語っている。



男装した麗人が舞い踊り、観る者すべてを魅了する独自のな「夢世界」を創りだしてきた宝塚歌劇団。約1世紀もの歴史を誇る、日本舞台芸術の代表格だ。

歌劇団の演出家・白井鐵造は、そんな華やかな世界とは結びつかない、山里の村・春野町で生まれた。歌や本が好きな少年時代の唯一の楽しみは、年に一度やってくる旅一座の芝居だった。就職のため13歳で親元を離れた白井は、当時一大ブームを巻き起こしていた、歌とダンスとドラマのある和製ミュージカル『浅草オペラ』に興味を抱くようになった。

そして、大好きな芸能の世界へ飛び込むため、上京する決意をする。17歳のことであった。東京では音楽、舞踊、演劇の修行に励み、その後、宝塚音楽学校へ助教として入団。ダンスの振付けや脚本を書き始め、みるみる実力を発揮していった白井は、レビュー全盛期だったパリへ留学することになる。このときの経験が貴重な財産となり、帰国後1930年の公演「パリ・ゼット(パリの娘)」では、本場仕込みのダンスと豪華な羽飾りで、観客を驚かせた。パリの街角で出会ったシャンソン

「白いリラの花咲く頃」をすみれに変えて翻訳した主題歌「すみれの花咲く頃」も大ヒットし、レビューの完成形として高評価を得たのであった。

生涯で約200作品を発表した白井は、晩年「わが人生は驚きの連続だった。その感動によって宝塚の舞台を作ってきた」と語った。幼い頃見た芝居、パリで見たオペラ：「はじめ見たときの驚きと感動」を創造のパワーに変え、「宝塚レビュー」を揺ぎない芸術へと築きあげた。白井の功績は、可憐なすみれの花を通じて後世まで咲き続けるだろう。

浜松市白井鐵造記念館

白井鐵造の栄誉を讃える記念館。愛用のグランドピアノをはじめとする身の回りの品々や自筆の脚本原稿、ポスター、楽譜、宝塚関係資料など約600点の貴重な資料を展示している。



静岡県浜松市天竜区春野町宮川1768
TEL.053-989-0200(浜松市春野文化センター)
開館時間/9:00~17:00 休館日/月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
入館料無料



木下恵介38歳「肖像」撮影時(1948年)

戦後の日本映画黄金期に名を馳せた監督・木下恵介。「半世紀たっても色褪せない」といわれる木下ワールドは、生誕二〇〇年を迎えた今、再評価されている。その魅力は、不朽の名作「二十四の瞳」をはじめ、全49作品すべてに散りばめられていた。

木下恵介

天才と呼ばれた映画監督

1912年、浜松市佐馬町の食料品店「尾張屋」の五男として生まれた木下恵介。両親からあふれる愛情を受けて育った少年は、両親の影響から映画と芝居を愛し、小学3年の頃には童話や詩を作るようになる。豊かな感性と創造力の礎は、家族と過ごした幼少期に育まれていった。浜松工業学校(現浜松工業高等学校)を卒業すると、すぐに上京し、映画の世界で修行に励んだ。夢への階段を着々と上っていた恵介だったが、監督昇進を目前に控えていた1940年、召集令状を受け戦地へ赴くことになる。およそ1年もの間、映画

から離れざるを得なかった複雑な想いは、その後、創作への食欲なパワワーの源となった。1943年「花咲く港」で監督デビューを果たした後は、日本映画界を支えながら現代につながるテレビドラマの魁として進出。幾多の名作を生み出し、後世まで語り継がれる巨匠となった。

木下監督は、生涯に渡り「本当の人間を描くことに信念を燃やし、日本人の美しさ、醜さ、強さ、弱さを見つめ続けた。抒情的作品、社会派作品、コメディ作品、映像表現を駆使した芸術作品など、ジャンルはバラエティに富んで

はいるものの、そのすべてにありのままの人間が描かれている。つねに新しい作品に挑戦する、革新的なクリエイターであったと同時に、「人間と人生を通じて生きる喜びや真の人間愛を伝えようとした木下監督、「すべての人々を幸せにしたい」と願うやさしさが作品に宿り、今を生きる人々へエールを送り続けているのかもしれない。木下恵介の真の魅力は、生誕100年を経て、今、再び歩き出した。

きのしたけいすけ

木下恵介 生誕100年 プロジェクト

2012年12月5日 生誕100年を迎えた映画監督・木下恵介。生誕100年にあたり、浜松市、松竹、小豆島町が手を結び「ひとつ木の下プロジェクト」を立ちあげた。木下作品を国内外へ届けるために、各地での作品上映やイベントを展開している。

公式サイト www.shochiku.co.jp/kinoshita/

多彩な木下ワールド・主な受賞作品リスト

「花咲く港」(1943年)

〈受賞〉山中貞雄賞

「破れ太鼓」(1949年)

〈受賞〉1949年度 キネマ旬報日本映画ベスト・テン 第4位

「カルメン故郷に帰る」(1951年・カラー)

〈受賞〉1951年第6回毎日映画コンクール脚本賞、NHK映画ベストテン第1位

「日本の悲劇」(1953年)

〈受賞〉1953年第8回毎日映画コンクール脚本賞、1953年度第4回ブルーリボン賞脚本賞

「二十四の瞳」(1954年)

〈受賞〉1954年キネマ旬報日本映画ベスト・テン1位、ブルーリボン賞作品賞、毎日映画コンクール、日本映画大賞、1955年度ゴールデングローブ賞(米国) 外国語映画賞

「太陽とバラ」(1956年)

〈受賞〉1956年ゴールデングローブ賞(米国) 外国語映画賞、キネマ旬報日本映画ベスト・テン9位

「喜びも悲しみも幾歳月」(1957年・カラー)

〈受賞〉1957年芸術祭賞

「樫山節考」(1958年)

〈受賞〉1958年 第13回 毎日映画コンクール 日本映画大賞 監督賞 音楽賞、1958年度 キネマ旬報日本映画ベスト・テン 第1位、芸術祭、ヴェネチア映画祭正出品作

「永遠の人」(1961年)

〈受賞〉第34回アカデミー賞の外国語作品賞「Eien no hito」としてノミネート、キネマ旬報3位

「衝動殺人 息子よ」(1979年・カラー)

〈受賞〉キネマ旬報日本映画ベスト・テン第5位

木下作品は、49本中20本がキネマ旬報ベスト・テンに選ばれている。

偉人の足跡をたどる

木下恵介記念館

人間の姿を描き続けた木下恵介の功績を称え、2001年7月に開館。監督ゆかりの資料の収集と展示、恵介の研究をはじめ、上映会も開催している。建物は1930年に「浜松銀行協会集会所」として建てられ、現在は浜松市指定有形文化財に指定されている。



生誕100年記念展「天才と呼ばれたオトコ」

2013年3月24日(日)まで開催中

これまで未公開だったプライベート・グッズや、未完になった映画脚本などを展示。記念館オリジナル映像も公開。

静岡県浜松市中区栄町3-1 TEL.053-457-3450
開館時間/9:00~17:00 休館日/月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
観覧料/大人100円 (70歳以上、高校生以下 無料)
www.hcf.or.jp/facilities/kinoshita/



未来を創る次世代アーティストの躍進

浜松で、東京で、そして世界で活躍する浜松出身の若手アーティストたち。

熱い想いと斬新な作品はとどまることを知らない。

その勢いで、これからの芸術文化界を盛り上げていこう。

リズムカルな線質、繊細な墨色、淡々と流れる中に、生きた決意を秘めているような…。気鋭の書道家・中澤希水さんの作品からはそんな印象を受ける。突き詰めていったら、ルーツは中田島砂丘でした。希水さんは、自身のスタイルについてそう語ってくれた。「帰省した際、必ず訪れるのが中田島砂丘です。カメラ片手に一人で、目的は作品の完成度を高めるためです。砂、海、太陽しかないあの空間に包まれると、何を残し、何を削るのか？」のヒントが見えてくるんですよ。僕はさまざまなジャンルの人、物、情報から、書道との共通点を探ったり、インスピレーションを受けているのですが、中田島砂丘もそのひとつ。というか、一番ウエイトが高いと言っても良いくらいですね。」

「書道そのものの本質的な良さを伝え、敷居は下げずに、間口を広げていくこと」をテーマに活動している。「これだけパソコンが普及した時代でも、日本には、手書き文字の美しさや温かみを大切にする文化が残っています。僕は自身の作品や教室を通して、手書き文字の文化を継続・発展させ、書道の持つ本当の楽しさを広げていきたいんです。白い紙と黒い墨、正しい姿勢と筆を持つ仕草、鍛錬からなる必然性と書き直しできない偶然性。こういった魅力を、トレンドや一人一人の個性を交えながら伝えていけたらと考えています。」

2013年、希水さんが仕掛けるのは2つの実験的な挑戦だ。ひとつは「技術と感性が凝縮されているけど、誰でも読めて意味がわかる」。もうひとつは「不思議と感覚に響いてくるが、誰にも読めず意味不明」。さて、どんな「書道の楽しさ」が展開されるのだろうか。



書道家 中澤希水

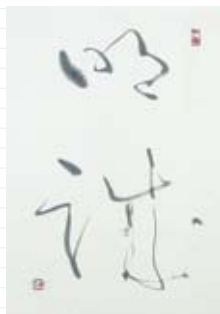
1978年浜松市生まれ。希水會主宰。大東文化大学文学部中国文学科卒業。両親ともに書道家で、幼少の頃から筆を持つ書道界のサラブレッド。数々の書道展で高い評価を受け、テレビ・雑誌メディア、商品ロゴ制作、書道教室(半蔵門、川越、日本橋)など、多岐に渡って活躍。2012年11月に女優・熊谷真実さんと結婚したことも話題になった。
http://kisui-office.com/

希水と書道 書道と希水

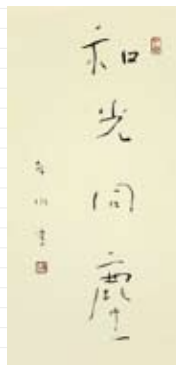
3700年もの歴史を誇る、書道の世界。
そこに今、点滴のごとく加わる「希水」のエッセンスがある。
テーマは、書道の本当の良さを伝え、広げていくこと。



母校(八幡中学校)の卒業証書を毎年書かせてもらっているのですが、これは書道家として本当に幸せなことだと感じています。音楽教室には、僕が中学2年生の時に書いた「精一杯の自己表現」という書も未だに残して掲げてくれています。



『明誠』



『和光同塵』



『無礙』

人と話すのが苦手で、唯一の自己表現が「絵を描く」こと。スサイさんが生み出す独特の世界観は、そんな些細な生き方によって形成されていった。「キモ可愛い」と表現したくなる生き物たち、軽やかであるがバラエティーに富んだ配色センスが折り重なり、一目で「スサイさんの作品だよ」と印象付けてくれる。インスピレーションは浜松の大自然。そこで出会った草木や動物、昆虫や微生物たちがモデルになることが多いそうだ。今後の目標を伺うと「病院や幼稚園、商業施設や駅など、人が雑多に行き交う場所で引き続き作品展示をしていきたい。あつ、あと犯罪抑止につながるような作品とか。アートって言うと敷居が高く見られがちですが、私は『社会貢献できるアートの力』

アーティスト スサイタカコ



浜松市生まれ。「触って体感してココロ躍る 独特な味わい深い 唯一無二の世界を生み出す」をコンセプトに、壁画や布・革を使った立体作品、アニメーション制作、ウィンドウディスプレイなど、幅広く展開。BEAMS (ビームス)、ワコールなど服飾ブランドとのタイアップ、台湾そごう全店のディスプレイを担当するなど、その活動は海外にも及ぶ。
<http://www.13.ocn.ne.jp/~taarucci/>

を打ち出すことで、みんなの生活の中に入れて込む表現をしていきたいんです」とのこと。どこかキュートで、なんだか元気に、ちよつと奇妙なスサイタカコワールド。一度迷い込んでみると、人と人とのつながりの大切さ、そして、やさしく包み込まれるような「生きていく実感」を沸き起こしてくれる。

近年は絵画だけでなく、立体造形やインスタレーション(空間美術)、ワークショップに至るまで幅広い活動を展開。「見るだけではなく、触って、遊んで、会話して、笑ってもらえることが、私のモチベーション」と語る。

写真提供:アートスペース油亀



奇妙な世界が、人をつなげ 社会に貢献する

音楽に合わせてステップを踏みながら、巨大なキャンバスに絵を刻んでいくパフォーマンスアート。「ステージは一発勝負。緊張感と躍動感、すべての情熱が一体化したとき、息もつかせぬパフォーマンスが完成します。そのためには、1秒単位の緻密な計算と練習が欠かせません」。絵を描くことへの情熱は幼少期に始まる。型破りな構図で大人たちを驚かせ、5歳の頃から数々の絵画展で受賞してきた。そんな自身の経験とオーバーラップさせるかのように、2012年は、地元・浜松の小中高生を交えた創作活動を盛んに行っている。

「崇高なものだけではなく、『みんなで楽しめる芸術』が存在することを発信しています。物質の豊かさだけでは補えない、心の豊かさを育ててもらいたいですね。芸術にはそんな力が秘められているんです。」と熱く語る山内さん。現在は「異分野との融合」をテーマに掲げ、誰も見たことのない新しいアートを

模索中。「オーケストラと一緒にパフォーマンスをしたいと思っています。パフォーマンスアートが、視覚に訴えてくる楽器の一部になるような」。それは、人々の奥底に眠る厚い感性を呼び覚まし、心が激情する瞬間を体験させてくれるだろう。

情熱が弾けたとき 革新的な芸術が生まれる

「自然豊かな浜松の景色や、近所で見かける動物を描くのが好きだった。10歳の頃に描いた牛の絵は、子どもたちと一緒に創作活動をするきっかけになった、大切な作品」と語る山内さん。



パフォーマンスアーティスト 山内清司



東日本大震災の復興を願い描きあげた「レイエム」。魂を鎮めるための演奏をする指揮者は、情熱と悲哀に満ちている。

1974年浜松市生まれ。世界各地を放浪しながらアートを学び、現在はオーストラリアと日本を中心に活動。コンセプトは「Fusion of Passions(情熱の融合)」。オペラ歌手やピアニスト、日本舞踊など様々な分野とコラボレーションし、オリジナルのパフォーマンスアートを展開。
<http://fusionofpassions.jimdo.com/>